老舗の街・尾張町シリーズ26

尾張町を支えた女たちその拾伍

ちょっとネマッテ(座って)お話を

目　次

はじめに …… 1

軍需工場へ行くのが嫌で …… 2

二人で日本橋にいた修行のころ …… 2

尾張町に縁があって …… 4

この街で商いするなら、お茶くらい飲めんと …… 6

帯はいろんなことを表現出来るんよ …… 10

ご近所はこころの宝物 …… 12

帯屋の女将 …… 14

店を覗く現代っ娘 …… 17

どっちがお客さんなの …… 17

代々尾張町に …… 19

あとがき …… 22

表紙絵　　石野琇一(宝生流教授嘱託・石川郷土史学会・WEBMASTER)

はじめに

ときどき思うのは、皆さん何であんなに力んでいるんやろう。

そりゃ、世紀も新しくなったし、世の中ＩＴがどうのといってどんどん様変わりしているし、おまけにここのところ景気も良くない。何とかしなければ....と“一生懸命”なのは分かるんやけど、どこかしっくり来ない。

もしや「今」だけを考えているんだろうか。「今」を起点に物事を判断すれば、どうしても目先のことに終始してしまう。時間軸を大きく捉えた中での「今」という判断をすれば、目先の枝葉末節に囚われなくなって来る気がするんやけど。

まずは「続けて行くこと」。続けることが信用となり、続けることによってお客様がいつでも安心して来られる店となること。いうまでもない、「商い」は“飽きず”に“続ける”ことやし、実際にそうした地道な努力がいつの間にか時間を積み重ねた老舗が並ぶ商店街となって来たのでしょう。決して人様に自分のことをひけらかさず、かえって人様の喜ぶためにお世話することを第一義にして来たことが、今日に繋がっている。と、信じることが、これまでも、これからも私たちの励みとなっているのです。

何気なく、当たり前にしていること。昨日まで続けて来たことを守り、今日と同じように見える明日への架け橋をして行くこと。尾張町を支えて来た女性達に共通して言えることは、たったこれだけなのです。難しい経営戦略も接客技法もなく、ただ正直に商いを手伝うこと。「シンプル・イズ・ベスト」。

家というもの、店というものは、決して大黒柱といわれる男だけが支えたものではなく、妻も一緒になって支え、それを子供たちに引き継いで来たように思われます。力の大小でなく、気持ちをひとつにすることが大事なのでしょう。私たちは、「自分が！」ではなく、「自分も」かけがえのない一人となって妻や皆と一緒になって、ここで“一所懸命”(その時々に懸命になる一生懸命と違って)やって行くんだと感じる時、老舗の総合力を発揮出来るのだと知るのでしょう。

軍需工場へ行くのが嫌で

「すごく、やる気のある人だよ」

ちょうど戦争も激しくなる昭和16年のころ、男の人は次々と徴兵に行くし、残された者もお国のためといって、奉仕でいろんな工場へ働きに行かされる毎日やった。

覇気のある男の人がだんだん町の中に見あたらなくなる時だけに、耳新しく聞こえたのかもしれない。それに親の持ってきた縁談に逆らえるわけでもないし。何より、結婚すれば軍需工場へ行かなくてすみそうだ。まだ親元を離れたことがない私にとって、知らない人から「あれも駄目、これも駄目」と命令されるのがおっくうやった。何より町中に残っている人を見回すと、年頃の男より女の数の方が多かったし、戦争に行ってしまっていつ帰るか分からない男より、目の前のしっかりした人の方が良い。

見合いしてみると、確かにどこか普通の人と違う気がする。話を持って来た人を辿って聞いてみると、京都にいる染物屋の義理の伯父を訪ねて行くも、自分のやりたいことと違うので、汽車賃だけもらって一人東京へ行き、今の奉公先を自力で見つけたのだとか。

普通は誰かの紹介だとか、親などがやっている店を将来継ぐための修行だとか、しっかりした後押しがなければ滅多に雇ってもらえないはずなのに。まして戦争のただ中なのに。この人はどうやって今の店に入ることが出来たんやろう。口数の少ない、とりたてて優しそうにも見えない男の人なのに。断る口実もなく、それにこころのどこかに何かを感じたのかもしれない。出会いっていうのは不思議なもの、後は親の進めるままに結婚した。

二人で日本橋で修行していたころ

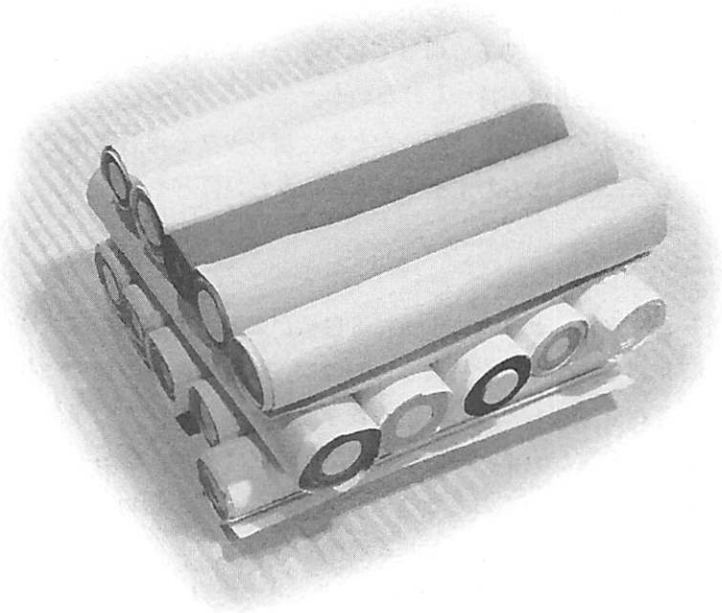
結婚はしたものの、すぐに二人で住む処がなかったのか、東京へ行って一緒に住んだのはちょっと後のこと。

町には小学生のような子供たちがわいわい騒いでいて、あちこちにその子たちが書いた号外がいっぱい貼ってあり、東京府から東京都に代わったお祝いをして

いた昭和18年。「紀元は2600年、ああ一億の何やら～」と歌が溢れるころになってからのこと。

賑やかな町の人たちをよそ目に、ようやく東京都で生活を始めたばかりの私たちにとって歌を唱っている余裕なんてなかった。その日その日のカツカツの生活。贅沢に白米を食べるなんてもってのほか、ご飯は豆粕にお米を混ぜる質素なものがあればいい方だったわ。さいわいにもお勤め先で朝ご飯が出たので、一人分の節約にはなったけど。

日本橋にあるお店の様子を聞いてみると、今でこそ賑やかな処として指折り数えられるようやけど、主人が通ってた頃は卸問屋の店が並んでいるばかり。とはいうても、名の知れた財閥の店もたくさんあって格式もあったし。そやさかい、店の前で大きな声を上げて客引きをするより、店の中で大番頭さんや小番頭さんたちの言われるままに、主人も含めて丁稚人たちは汗水流して仕事するのが当たり前。無駄口をたたいている暇もないさかい、静かで落ち着いた通りやったみたい。



そんな静かな町であっても住み込みの丁稚さんは、薄暗い朝のうちから大変。木綿の袋にぬかを入れて、店やら旦那さんの本宅を日課のように磨き上げなならんのや。勿論、せっかく寝ている旦那さんを起こすような大きな音を出してしまっては怒られるし、というてゆっくりし過ぎると旦那さんが起きるまでには終わらんし。

やっと一段落してから朝ご飯や。外周りの仕事をするほどになっていた主人は、このころに店に着く。

「精吉か」

「へえ、おはようございます」

番頭さんくらいから、やっと名前で呼ばれるけど、他の者は皆んな「〇〇吉」と呼ばれてしまうんだって。主人も、清一っていう名前があるんやけど、誰も呼んでくれんらしい。

朝ご飯は、皆んな揃って一斉に食べ出すんやけど、皇室と取引のある程の店だったので躾には厳しく、せっかく出された物を残したりしたら大目玉をくらう。仕方なく、嫌いな物が出たら、袂の中にでも一端隠して、後でそっと捨ててたらしい。もったいない、家に持って帰ってもろうたら私が食べるのに.....。というても、夜遅く帰るまで生ものが持つわけないか。

そやけど、白菜の漬け物がうまかったとか、塩ジャケと海苔が出たとか。倹約生活をしている私には、おもわず生唾を飲み込みたいほどやった。

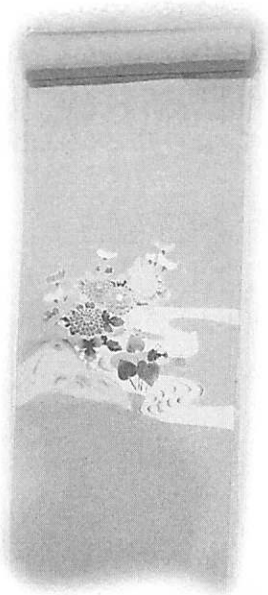
尾張町に縁あって

戦争が激しくなると、とうとう主人にも白紙が来て、池袋の中島航空へ行くこととなり、昭和19年に生まれた長女もいたので、私らも津幡の親戚に疎開することになった。それもしばらくのこと。終戦を迎え、中島航空から金沢の七連隊に来ていた主人との生活が始まるのに、そんなに時間はかからなかった。

主人は、東京で何十年もこの道で修行してきたもんで、品物に対する目利きが鋭く、私らがはっとすることをときどき言うまさる。

「儂のために仕入れるんやのうて、これやったらお客さんが喜んでもらえる」と、

自分の心に響いてくるものしか買わん。どんなに高かろうが安かろうが、そんなことは二の次や。肝心なのは商品の出来や。



そう言うとる端から「品物に惚れて仕入れるんやさかい、売れんでもいい、誰も良さを理解してもらえんのやったら、自分の宝にすればいい」

そこまで言い切られると、私もちょっと小言を言いたくなる。何のために朝早く送り出した後、外商から帰る夜まで店番しているのか。やっぱり、皆んなが食べて行かなければ商売が続かないと思い、少しでも店の役に立つように頑張っているのに。それを、売るために仕入れるのでない！みたいな言い方をされたんでは....。とは言いながら、本当は泊まりで外商をした方が体が楽なのに、お金が掛かること以上に私のことを気遣って、どんなに遅くなっても帰って来てくれているのが分かっているんだけど。女って、どうしても目先の事を先に口走ってしまう悪い癖があるんかしら。

くよくよし勝ちな私の気持ちを断ち切るように、朝になると主人はまた外商に出掛けて行く。

いつか、自転車に一杯の商品を積んで商いに出るようになりたい。口癖のように言っていたら、尾張町のここの店を持っていた人から、

「縁あって東京へ行くようになったけど、あんたなら、この店を買うて欲しい。」

見込まれたからでもないけど、物事にはひとつの節目があるようやさかい。きっと今がその時なんや。心に決めて、この街に来ることにしたんやった。

この街で商いするなら、お茶くらい飲めんと

ようやく住み出すと、今度は

「ここはやたらなことでは商売出来ん。ただ単に物売りするだけでのうて、風格に合うたようなことをせなならん」

何を言い出すのかと見守る内に....。

しばらくは考えとったのやろう、ある日突然！
「お茶くらい飲めないと」
「尾張町のこんな処に住むからには下手なことしてご近所に迷惑をかけるわけにはいかん。お茶のひとつも習うとかんとならんし、何んにしろ嗜み(たしなみ)が肝心やから」
ふむ、そうや。
我が身で我が身を納得させるような相づちを打って、横で見ている私の方が、何やら可笑しく思えたり、主人が妙に可愛く感じたり。男の人って、案外純情なものなんかしら。
「そやろ、おまえ」
思わず、どう返事したら良いか分からず、あいまいに口を濁して、浅野川の向こう側にあるお茶の先生の処へ見送ったり。でも、いつまで続くのかと心配するどころか、自分の生活の中に溶け込ませてしまって....。
そうこうしてお茶友達が出来ると、自分が習いに行くだけやのうて、その友達を店に呼んで来て楽しんでたわ。私も、主人が習いに行っているだけやった時と違うて、目の前でお茶を飲まれると、どうしても注意が向いてしまうのは致し方のないこと。いつの間にやら、ちょこっとずつ、真似事から始まって段々と飲めるようになってしもうたわ。
お稽古事って、「習うより慣れろ」って聞くけど、ほんまにそうみたい。特に女の人は、男の人のように理屈から入って行くことが苦手やし、気持ちからの方が入り易いみたい。気が付くと、私もちょっと格好になって来たやろか。
尾張町に来る前は、毎日の生活のことばかりが頭にあって、お稽古事なんてのは、まったく縁のない他の世界の人たちのすること。と考えていたのに、こうして自分たちの店を出してみると、商売の中で必要なことなんや。決して特別な人たちの贅沢やのうて、人様と顔を合わせて商いをする上で、何んていうのかしら大事な....そう料理でいえば味付けといったところ。
だって味のない料理なんて食べられた訳ないし。なのに、今時の商売ったら、ただ値段が安い！だけしか言わず、肝心の商品のことはあんまし言わないし、

ちょっと詳しく聞こうと思ったら説明書に書いてあること以上は知らない。なんていう始末。やっぱ、形ばかりが先に来て、中身は後送りになっている、味付けのメチャメチャなものを見かけるようになって、これからどうなるんやろうと寂しい思いになるのは私だけなのかしら。

その点、ここにはきちんとした味付けはあるし、それぞれのお店の人も商売には自信とこだわりを持っているし。私の店も早く皆んなの仲間入りをしなくっちゃ、と励みになる。実際、ようく見回して見ると、結構お稽古事している人もいるし、びっくりすることにはお師匠さんといわなくても、人に教えることの出来る師範並みの人が多いのに驚かされる。あそこの時計屋さんの旦那さんは小唄の、向こうのお茶屋さんの奥さんは裏千家のお茶の、突き当たりの花やさんは勿論華道の、こっちのテント屋さんの息子さんは若いのに宝生流能楽の謡の.....え～っ、どうなってるんやろこの街は。

何や、尾張町の街をあげて、今時の若い人に知ってもらおうと商店街謡曲教室もやっているし。それも10年以上も続いているとか。

いまでも、そんな主人のものを供養がてらにお茶道具のいくつかを、並べてある商品の帯の間いさに置いておくと、道行くお客さんから「これ、売り物」と言われ、ちょっと困ってしまうこともある。まさか、形見がてらに置いてあるとも言えんし、お客さんから見れば、金沢らしいあしらいに感じるんやろし。そう思って、改めて見直すと、案外といい雰囲気なんやね。この牛車やお茶碗。考えてみれば、皆んな主人が何んだかんだいいながら集めて来たものなんやけど。この街以外だったら、こんなものが商品でないのに、いつのまにか商売のきっかけになるなんて思いもよらん。けど、だからこそ、この街は時代を超えて残って来たのかもしれん。

ほら、帯と帯の間に茶道具が飾ってあるでしょ。商売と趣味が一緒になるのも、案外いいものでしょ。それに、尾張町らしく似合っているし。

小さくても自分で切り盛りしている店やから、こんなことが出来るんかもしれん。これが、どこか大店に勤めていて、支店の一軒を任されているだけやったら、こんな好き放題に茶道具と商品を並べられんかったと思うわ。

前田のお殿様に見込まれて、名古屋の荒子から一緒に金沢に付いて来て、「お前たちは儂の故郷から来たことを忘れずにいて欲しい」と、尾張名古屋の”尾張町”という名を付けてもろうた特別な街なのやし。お殿様の楽しい時も苦しい時も、いつも一緒になって付いて来た長い長い年輪のようなものがあるんやろう。そんな中から、一番大事なんは『人様(お客さん)のことを第一に思う心遣い』やと深く染み込んで来たんか。

そういえば、ご近所の女将さんと話していても、あんまし値段のことを聞かんような気がする。耳に残っているのは、取り扱っている商品の自慢と、それのびっくりする程に詳しい知識ばっかり。帯の専門店にこだわった主人の気持ちにぴったし合った街なんやと、ようやくこのごろになって納得している私。

帯はいろんなことを表現できるんよ

ほら、帯ってだいたい巾が決まってるでしょ。どうしてこんな巾になったのか、難しいことは分からんけど、私からすれば今のままがちょうど良いみたい、だって、ただ巾が広かったって、そこにいろんな柄や絵を描くには大きすぎるような気がするし。やっぱ、限られた巾の中で、知恵を絞って表現するってのが好きやし。

誰にしたって、何もかも好きなだけお点灯(天道)様から与えられている訳でなし。両親からこの体をもらい、主人と出会い、尾張町のこの場所に縁あって店を出さしてもらっている。これが私の与えれている世界やし、これをどういう風にして活用するかが一番大事やと思う。ちょうど、帯が自分の与えれた生地巾の中でたくさんの表現をして楽しませてくれるように。

今でこそ帯の種類も増えて、特に女の人のは丸帯・袋帯・名古屋帯に袋名古屋帯、え～とそれに腹合(はらあわせ)帯・単(ひとえ)帯・半幅帯と一杯あるし、ま

あ男の人はそれに比べて角帯と軽装帯くらいしかないけど。あと子供用の帯と。....こんなにあるのも、帯の歴史がすごく古いからやと思う。何んといっても大昔に人が初めて何かを来た時に、その衣類を体にきちんと結び止める紐(ひも)が始まりやもん。そのうちに実用から段々に飾り付けるようになると、もう私ら女の出番や。

いつだったか主人から教えてもろうたけど、古事記の記録に帯のことが『たらし』と載っていて、“結び垂らす”という意味から来たらしい。だから帯も、昔は“えび”と読まれ、“ゆひ(結)”から“えひ”→“えび”→“おび”というようになって来たんだとか。そうした帯が本当に使われるようになったんは、太閤秀吉さんからこっち、お公家さんが下着として着ていた小袖が表着になって、小袖の前合わせを紐から巾の狭い帯で押さえるようになってから。やっぱり、尾張

町を作ってくれた前田のお殿様の知り合いが絡んでくるところなんか、この店の商売も街に縁が深いんかね。

ご近所はこころの宝物

ここにこうしてネマッテ(座って)いるとね、表を通るいろんなお客さんが覗いてくれるんよ。普通の通りすがりの人だったり、観光の人だったり。こないだはＮＨＫの大河ドラマ『利家とまつ』の視聴率が良かったもんで、尾張町っていう名前で結構いろんな人が来て下さるし。

本来、ここはお馴染みさんっていうか常得意さんって人が多くて、たいていは何回が来た人ばかり。

「この前もどうも」

で始まる挨拶の中に、まったく見知らぬ人が、おずおずと....でも興味深そうに入って来ることもある。そんな時は、あちらから声を掛けられるまで、笑顔でお待ちしているだけ。

そうそう、目立たないけど、ご近所さんは一番の宝物。お隣の印房店のお爺ちゃんや、ちょこっと離れた合羽屋の大奥さんなんか、私がこの街に来たばかりのころには、ほんまにようありがたかったわ。口では厳しいこと言うとるけど、親身になってくれてんのがよう感じられる。

けど、それもこちらが一所懸命にしていることが分かったからこそ言ってくれてたんや、ということが最近になって腑に落ちた。ただ単に、言われたことを言われたようにしかしない、ごく一部のお勤めの人のような態度では決して声も掛けてもらえなんだはず。

主人が着物をよく着る人たちの処へ商売に出掛けて行っている間、座っているだけの脳なしやったら、きっと誰も構ってもらえんかった。主人の留守の店を私が守らなあかん。主人がこだわって集めてきた帯を、より良い姿で並べて、この店に来るお客さんに見てもらわなならん。それには何をどうしたら良いやろか。ただ単に並べただけやったら、価値の高い帯と低い帯の区別が付きにくいし、一番高い帯を通りの前に出しっ放しにしておいたら陽に焼けてしまうやろし、とい

って全部引き出しに片づけたらせっかくの帯を見てもらえないし。

いろいろ考えたり、品物の帯を並べ替えたりしていると一日の短いこと。

「オイデマサル！(いらっしゃる)」

ふと顔を上げると、お隣のお爺ちゃんが看板を持って立っている。

「こないだいうとった看板やけど使うてみん(使ってみない)、店の前がアイソムナイ(何もなくて寂しい)と何を扱っている店かお客さんが分からんやろ」

この街に住み着いたことが、こんなに暖かいことやったとは....。

口数の少ない男の人と違うて、女の人はもっとスパスパ言うて来る。

いつやったか、お客さんにちょっと難しいこと言われて、それに相づちを打てんで「何が尾張町の帯屋や、何んも知らん者が分かったような顔して、ようも店番してるもんや」と怒られて気が滅入っている時なんか。

合羽屋の大奥さんが、まるで今のことを知っているかのような具合で

「ちょっと、居る」
ずかずかと店に入って来て
「大体、最初から何もかも知っていたり、分かってたりする方がおかしいんよ。それに、お客さんなんて好き勝手を言うもの。けどね、言うても駄目やと思われたら何んにも文句いわんもの。言われるだけ益しやと思えば、腹も立つ訳ないやろ」
「ほら、家の嫁が作った漬け物が、少しは人様に食べさせられるようになったんで持って来たから」
元気良く言われると、「そうかなあ～」と感じるから不思議なもの。
帰り際に
「何があってもお客さんに口答えしたらあかん。商売人は、ただただ、まいどありがとうございみす、とお客さんに頭を下げるもの。だってお客さんのお陰で生活出来るんでしょ」
そうして、ちょっと笑いながら
「よっぽど嫌な相手やったら、頭じゃなくってお尻を上げればいいんよ。そしたら自然に頭は下がるから」
こんな考え方って、商売人の女将さんの毎日のお客さんとの応対から覚えるんかしら。

帯屋の女将

教えてもらうことって、甘えるってこと。何も自分の身に付かないことなのかしら。
尾張町の店って、老舗としての雰囲気は似ているんやけど、それぞれの商売の違いによってちょっとずつ違う処があるみたい。そやから、人の店の真似事をしても、結局のところ役に立たんこともある。お菓子屋でもなく、薬屋でもなく、合羽屋でもない、私がネマッテ(座って)いるのは帯屋なのやし。
「お前が店番してくれている、と思うから儂は安心して外回り出来るんや」
滅多に話さない主人が、何かの折に喋ったことが妙に気に掛かる。私やったら、帯屋の女将として、大事なツボは押さえてくれる。いろいろ教えなくても、自分

から要ることは見つけ出して、ちゃんと帯の専門店としての対面は保ってくれるはず。

そりゃ、帯は着物のがなけりゃ締めるべき場所がない。着物を着ないで商売が出来ようか。と、気付けを習って一人で着れるようにしたのは、私の考えかもしれんけど。大事な主人の具合が悪くなったんでは元も子もない。

東京オリンピックが開かれた昭和39年に、長女は主人に似た良い旦那さんと結婚し、店は外回り二人に、かしまし店番二人となり、少うし余裕も出て来たのに....。何んで。

いつも渋い顔して、そりゃ主人のお爺ちゃんの従兄弟が、あの有名な哲学者西田幾多郎だったらしいけど、そんなんは大したことやない。大事なのは主人。難しそうな顔をしてるかと思えば、東京で職探しをする時に友達と一緒に浪花節を唄って歩いたり。尾張町に来てから突然お茶を習いに行くと言って私をビックリ

させたけど、実は苦心の東京時代に謡を習っていたり。仕入れ商品が気に入ってしまったら、売れなくても良いなんて駄々をこねたり。もう、どっちが年上なんだか。

昼間、店番をしていると、何故か正座しているほうが落ち着く。着物を着て帯を締めていると、背筋がピンッと伸びて、正座していると安心できる。主人が帰って来る時も、着物姿で迎える。

でも、主人が、お父さんが病気してからは、見舞いに行くのに着物では、と思い。それからは、もう洋服になってしもうた....。今では、もうお父さんに着物を着てないと怒られることものうなってしもうた。代わりに、娘の旦那さんが外回りしてくれるようになった。店番は、洋服を着た私になったけど。

店を覗く現代っ娘

2～3人の若い女の娘が、何か見知らぬものを見るように外からウインドウを眺めている。いろいろ話しているんだけど、言葉の意味が分からない。時折、きゃ～っと言って騒いだり、かと思えば笑ってみたり。若いってことは、いいわあ。私も昔は若かったんだ。あの若さを元にした体力と気力があったから、ここまで来た。

何も分からないと思いながら、いつの間にか少しは分かって来たのかしら。古いことより新しいことの方がいいに決まっている。なんて、単純に思ってた若い時代もあったけど、古さも新しさも気持ちの持ちよう一つ。どっちも大切やし、肝心なのは、新しいだの古いだのといっていることを超えた自然な器量の方が大事。

色の白い西洋人でもなけりゃ、黒い南方人でもない。難しい歴史のことは知ろうと思わないけど、長い年月で培われた日本人の生活が着物を生み出し、帯が使われるようになった。今の生活を支えているのは、そんな日本人のこころの蓄積なんやわ。いうたら、日本の女性の美しさを求める姿勢の歴史みたいなもの。

あんたらも、いつかそんな自分の立場が分かって来るようになって欲しい。出来れば、ちょこっとでいいさかい、着物でも着てみたら....。ショウウインドウを見るだけでも、まったく興味がない訳でもないのやから。

どっちがお客さんなの

東京のような都会から来ると、この街は落ち着いていていいんやろかね。

「今日は店の前を通るだけにしよう。入ってしまったら買ってしまいそうだから。」と思っていたのに、やっぱり入って来てしまった。見るだけにしようとしたのに、どうしても我慢できなくなって、それに思っている帯を他の人に買われたくないし。

「代金引換で、この帯お願い出来ないかしら」

お客さんにそこまで言われると、見も知らない人やけど、私も女やし、自分が気に入ったものを他の人に買われて、手に取ることが出来ないことほど口惜しいことはないさかい。それに、そんなに真剣な人に悪い人はいないはずやから。

「ええ、どうぞ」と、答えてしまう。

向かいに老舗の大きな薬屋さんや、隣の古い判子屋さんが軒を並べているもんで、この店の帯も良く見えるんかしら。でも、品物はあの人が目利きをして仕入れたものだから、そんじょそこらのもののはずはないけど。

そやから、近所の人だけでなく、わりと観光客の人なんかも立ち寄ってくれるし。いつだったか、東北の県会議員の奥さんが、主人の出張に付いて来て自分一人になった時間に、何とはなしに聞いていた尾張町の街に来てみたかったのでと言って、ここの店に入って来られたんやわ。

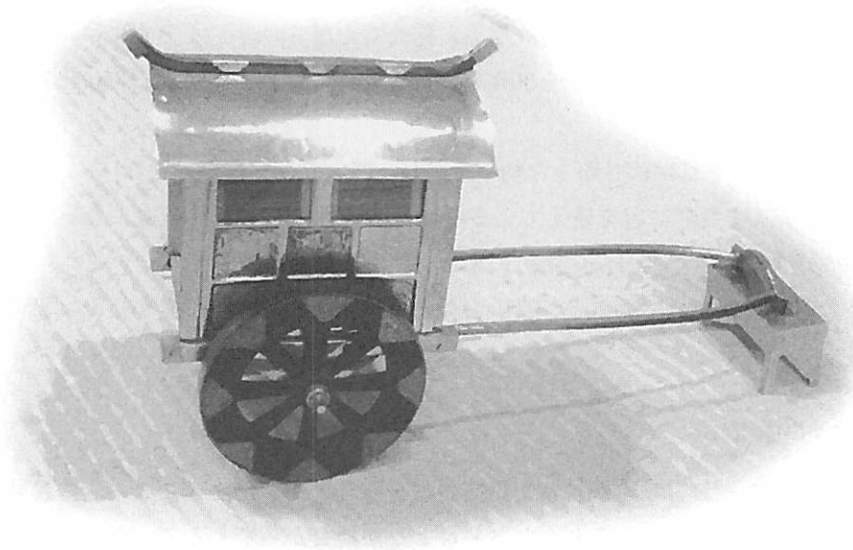
二人でお互いの街の話をしたり、娑婆の話をしたりしている内に、
「尾張町に店を構えているから、すごく古いんでしょ」と言われ、まだ戦後からこっち、商いを始めたばかりです。まだまだ格式なんてありませんよ。
謙遜して返事しているつもりでも、
「戦後からだったら随分長いんですね。加賀友禅の帯なんてあるかしら。」
「新しい、今流行りのものならどっかそのへんにあると思うけど、ここの店なら本当に欲しい30年ほど前の帯があるような気がするから。是非、見せて。」
でも、今時、そんな帯を....。
「いえ、きっとあるんでしょ。早く、見せてください。」
とうとう根負けして、奥から30年前の加賀友禅の帯をお見せするのに出してきて念押しすると、
「ああ、これこそ私が欲しかった柄の帯だわ。聞いてみて良かったわ。」
「やっぱり、尾張町に店を構えている所は、お客さんに対して親身になってくれるから好きなんや。今日は尾張町に来た甲斐があったわ。」
嬉しそうな顔を見ていると、良いものをお世話出来て本当に良かった。私の気持ちまで楽しくなって来る。

代々尾張町に

この前もあるお客さんが、家で箪笥の中を整理していたら、ここの店の包装紙に入った帯が出て来て、それをしげしげとながめながら楽しんでいる内に、そろそろ娘のために帯を用意せなならん。と思い立ったら、もう矢も立ても堪らず店に来たんや。
「私が今になっても娘の気持ちを持てるように、家の娘が将来、歳を取ってから眺めても満足出来る帯が欲しいの」
そりゃ、ぱっと見た目には良さそうに見える物を置いてある店もあるけど、この店のように後になってからも味わえるような物を置いてある店は、そんじょそこらにないし。きっと仕入れにこだわっているんでしょうね。
急に主人を褒められているんだと気づいて、赤らむ頬をそっと隠しながら

「ここでは、お客さんに喜んでもらえるような帯を揃えているだけなんですよ」

いつの間にか、主人の受け売りを平然と言いながら、今更ながら、いつも言ってたことの大事さを商売の極意として感じる。商売をしていて良かったわ。真摯な姿勢で商売を続けていれば、世代を超えてお客さんというのは贔屓(ひいき)にしてくれるんだし。



ほんならっ！、私が一所懸命に店を守って働けば、子供たちの時代になっても、お客さんに喜ばれる店を続けて行ける。三代、七代、十何代と続く尾張町の老舗だって、最初は家と同じ処から始めているんやし。私のような気持ちを持った人たちが続いているから、あれだけの老舗になったんや。

ご近所の老舗の人たちが、何やかやと構いつけて来るのも、まだまだこの店にも、切り盛りする私らにも、それだけのモノがあると思うてくれるからこそなんや。

時代も変わり、近くに映画館があって、最終のナイト上映が終わる夜の十時過ぎまで店を開いてたこともあったけど。今は終夜営業のコンビニならいざ知らず、朝早くから夜遅くまでの必要もない。代わりに、商売に対するこだわりは、昔の比ではない気がする。それこそ、専門店としての甲斐性の発揮しどころ。
「ようこそ、いらっし。まいどあんやとございみす」

奥田とし子・媼(おうな)について

大正13年2月23日生。独立心の旺盛な夫と共に日本橋で修行した後、戦後尾張町で店を構える。帯の専門店として夫が外交に回っている間、その仕入れたこだわりの帯をもって一人で店を切り盛りする。

あとがき

分かっているようで分かってない。分かってないようでいて分かっている。何んだかややこしい言い回しですが、どうも理屈から物事に入って行く人と、まず体を動かすことから物事に入って行く人との区別になるかと思われます。その行動の姿も、自分の責任を自覚して主体的に取り組むのか、他から言われるままに取り組むのか。

別の表現をすれば、作り出す人と使う人、お世話をする人とされる人、商売をする人と勤める人。それぞれが大事なのですが、この違いが微妙にその人の生き方に反映されて行くような気がするのは考えすぎでしょうか。

自分で選ぶことのないままにこの世に生まれ、両親の遺伝子と家庭環境や社会状況や歴史的状況の中で成長する時、自らの持っていたモノと周囲から与えられることのバランスの上で生きとし生ける者は、無限の個性を創り出して行くことと思われます。

たまたま、商人町の尾張町は、そうした個性のバラエティが似ている人が多く住む街として続いて来た....。また、縁あってこの街に嫁いで来た人も、商売人という生き方に馴染んでいるか、馴染むことが出来るようです。

「人間五十年、下天のうちを比ぶれば....」(「敦盛」の一節)

でも、商売人は体が動き、頭が鈍らずに店先に立てれば、50年と言わず、それこそ生涯現役(死ぬまで現役？)を通すことが出来るのです。一生、楽隠居出来ないかもしれませんが、これも一つの生き方。本人がそれで良いと解釈するならば、満足した人生になる事でしょう。

生き続けること、商いし続けることには、こうした物事に対する解釈をすっきりと自らのこころに決めることなのでしょう。商い人生を通じて、自分ではなく、人様のために何かお役に立つのが、この今の生業(商業)なのであり、例えその努力が目立たない程のものであっても、こつこつと着実に歩むことによって世代を越えて行く.....。前著の後、弟を亡くした筆者にとって、生業の有り様を深く考えさせられたことに感謝しています。

《さし絵の説明》

項　　目	内　　容
○表 紙	「紬の縞柄手作り座ぶとん」
<目 次>	
○二人で日本橋で修行していたころ	「巻物にした帯の山」
○尾張町に縁あって	「汐瀬(羽二重のような帯よう厚手記事)の加賀友禅の手書き帯」
○この街で商いするならお茶くらい飲めんと	「お茶碗(現大樋長左衛門作)」 「加賀象嵌の酒器」 「お茶碗(田原藤兵衛作)」
○帯はいろんなことを表現できるんよ	「汐瀬の加賀友禅の手書き帯」
○ご近所はこころの宝物	「帯地の看板」
○帯屋の女将	「煙草盆の木箱に入れる小火鉢(初代須田菁華作)」 「花瓶(開発文七作)」
○どっちがお客さんなの	「汐瀬の加賀友禅の手書き帯」
○代々尾張町に	「牛車のミニチュア」

発　行＝2004年7月吉日
著　者＝石野　琇一
さし絵＝石野　琇一
発行所＝金沢市尾張町１丁目１１番８号
尾張町商店街振興組合
尾張町若手会